

創学舎ニュース

No.281

高校生の面談から

●入塾面談などで高校生と話していると、時々頭が痛くなることがある。例えば、高2の生徒との入塾面談で、

「大学でどこか受けたい所はあるかい？」

「まあ、千葉大学あたり…」

私も、初めての頃は、それを聞いて期待したものだ。最近あまり期待していない。

「じゃあ、模試の成績はどの位？」

「いえ、受けたことありません。」

たいてい、こうなってしまう。大学入試は、高校入試と違って全国区の入試である。

さらに浪人生まで入ってくるのだから、現在の自分の実力を知ることとは非常に大切なことだ。高1になつて間もないなら仕方ないが、

高2の夏頃になつて、あるいは高3になつて、模試を受けたことがないというのは

論外である。

「現在の勉強時間はどの位？」

「一時間位かな」

さらに聞いてみると、

「高校入試の前と比べると、どうだい？」

「その頃の方が勉強していました。」

高校入試の時より勉強していないのでは、大学に



合格できないことくらい誰でも分かるはずなのだが、表情からは、その危機感は微塵も感じられない。部活でもバリバリやっていたら、まだ救われるが、何もやってないときは救いようもない。

一応聞いてみると、

「家では何をして時間を過ごしているの？」

「はあ、別に…」

ああ、聞くだけ無駄だったか。それからは、延々お説教が続く…。

●ここにあげた例は、稀な例ではない。いつもやっている面談の、いつもの内容なのである。総じて言えることは、まず現状認識が甘いことだ。よく生徒には言っているが、大学入試と高校入試は全く違う。勉強の内容を見ると量も質も桁違い、競争も一層厳しい。この当たり前のことを全く認識していない。

●また、現状認識が甘いことからみれば当然のことだが、受験に関する知識が不足している。受験に必要な科目の調査から始めて、何をどれくらいやらなければならないか、など全く頭に入っていない。

●「あ、これは自分のときの面談だ。」と思っている君、まあ、塾に来ているだけ他の人よりはマシなのかもしれないが、来ているだけでは何にもならない。とにかく大学に行きたいのなら勉強を開始し、続けること。高3の君も、これから九ヶ月、一日に平日五時間、休日に計十時間やれば最低でも一五〇〇時間できる。頑張ってください。

(大場)

類推能力を磨け



●「すべての国民は、法の下に*等であつて、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、*済的又は社会的関係において差*されない」という文章があつたとき、*の部分には、平等、経済的、差別という言葉が入ることは想像に難くないところでしょう。ところが現実には、程度の差こそあれ、この想像、類推ができない生徒が数多く存在します。そして、この類推能力の欠如が、学年が上がるにつれて大きな差となつて現れてきてしまうのです。

●初めに挙げた文章を板書し、*の部分のみがよく見えなかったとき、そこは何と書いてあるのですかという質問を発する生徒が必ず存在します。小学校の低学年ならば無理からぬことですが、少なくとも中学生以上ではかなり問題です。この質問をした生徒がノートをとるとき、文章の読み方は、す・べ・て・の・国・民・は…なのです。こう書くと、私はそんなひどい読み方していないとその生徒は反論するでしょう。しかし、それは初めに述べた通り、程度の差の問題であり、本質は同じなのです。初めて文字を習った子供は、す・べ・て・の・と一文字一文字正確に書くことから訓練を始めます。当然、読むときも一文字一文字しかできません。しかし、次の段階では、すべての・国民は…と文節ごとに読み始め、そして、さらに大きなまと

まりごとに読めるようになっていくという発達段階を経るのが通常です。しかしながら、先に挙げた生徒は、この通常の訓練が不十分であつたために、まとまりごとに文章を理解することができないわけです。したがって、一箇所でもわからない(読みとれない)と、全体の意味もとれなくなってしまうのです。これが、私の言う類推能力の欠如です。

●例えば、中学生が英語の教科書暗唱テストで文章を覚えきれない原因の一つも、この訓練の不足です。また、高校生が、英語の文章でわからない単語があると、その文章全体の意味がとれなくなるのも類推能力の欠如が原因です。単語数一万の受験生が、五千の受験生に英文解釈において敗れるのも類推能力の欠如のなせるわざであります。

●この類推能力を身につける第一歩は、速読速解の訓練です。あくまでも速読速解であり、理解を伴わない速読は全く無意味です。小学校の高学年の頃からは、常にこのことを念頭において文章を音読すべきです。この積み重ねこそが類推能力を磨く礎なのですから。

(村上)

国語の眼(読書)

●文章に書いてあることが分かるというのはどういふ力によるものなのだろう。例えば「雪が降っている」といふ文は誰にでも分かるが、それは誰もが「雪」を知っているからである。もし仮に、

雪を見たことがない人がいたとしたら、その人にとって「雪が降っている」という文は全く理解しがたいものになるに違いない。話をもう少し拡げて、夏目漱石の文学を論じた文章にわれわれが接したとき、もしこちらに夏目漱石の作品を読んだ経験が全くないとしたら、その文章の内容を正確に把握することは極めて困難なことになる。

●ところで、「雪」を知らない人には、実際に雪の降っている中へその人を立たせることで、雪が何であるかを教えることができる。だが、「芸術」だとか「人生」だとか「社会」だとかというものは

こういう実地教育で教えることが不可能な事が多い。われわれは確かに人生を生きてはいる。だが、人生論風の文章を読んで分かるためには、われわれが単に毎日を生きているという事実だけがあっても無力なのであって、事実としての人生をどう

いう角度から見て、その意味をどうとらえるかについて思考の訓練、および若干の基本的な知識の蓄積が必要なのである。そして、思考の訓練と知識の蓄積は多くの場合、読書を通して得られるものなのである。

●このように、文章を読み、理解するためには、理解のためのバックグラウンドとして広い読書体験を持つてい

ることが必要となる。もちろん過去の読書体験で養われた思考と知識がそっくりそのまま使えるとは限らない。新しい文章を読むことは常に何パーセントか未知の世界へ踏み込むという性格を持っているからである。だが、この何パーセントかの未知の世界へ踏



み込むための羅針盤としては過去の読書体験や人生経験しかないのである。いや、そもそも過去の読書体験がゼロに等しければ、文章を読むことは経験だけを頼りに未知の世界に踏み込むことになり、かなり苦しい文章読解になるだろう。

●このように、入試に限らず、およそ文章を理解するためには読書体験のたまた思考と知識の蓄積が必要なのだが、それにしては諸君の読書量は平均的には極度に低いと言わざるを得ない。さあ、どの分野でもいいから、興味があることについて徹底して読書してみませんか！ (柳)

脳が溶ける？(4)

●世界や日本の経済がどうなっていくのか全く分からないが、就職戦線には、早くも大きな影響が出ている。大学に入ってから、創学舎の仕事を手伝ってくれているOB達が何人もいるが、新四年生

はみな一様に大変そうである。人柄もよく、優秀で、私達よりもきつと良い人生を送れると思われるメンバーばかりなのに、門前払いをくらっている。企業が採用する人数がどこでも減っているのは事実だが、それにしても予想以上の厳しさだ。

●さて、きみ達が他人に対して冷たく、社会に対して無関心なのと同様に、社会もきみ達に冷たく無関心である。これは前号も書いた通り。その前提のうえできみ達は(勿論私達も)生きていかね

ばならない。ところで、生きるという行為には、自分の生命を支え、心を支えるという二つの側面があるが、そのどちらにも経済力は欠かせない。そしてそれは、通常は自分で起業するか、既存の組織に入って働くかのどちらからか獲得される。いずれにしても、き

●起業した場合、社会がきみの会社を必要とするかのみが決定的要因であり、就職するときも、先方がきみを必要とするかだけがポイントなのである。きみが、自分のことをどんなに高く評価していても、また自分では「ものすごくがんばっている」と思っている

●一方、「やりたいこと症候群」の存在も見逃せない。「やりたいこと」が見つからないが故に無気力な日々を送る若者は大勢いる。創学舎に通う高校生の中にもチラホラ。「やりたいことが見つければ、がんばれるんですが。」こんなセリフはおなじみだ。「やりたいことを探す日々」を否定するつもりはないが、現実的には、見つからない可能性のほうが高い。また、仮に見つかったとしても、それはいつになるかも分からない。そもそも全ての人間にやりたいことが見つかった時代などあったことはない。さらに、一番問題なのは、やりたいことへの思いの強さである。これで食っているのか？特定の職業に就くことで、経済的安定も



●「やりたいこと」が見つからないが故に無気力な日々を送る若者は大勢いる。創学舎に通う高校生の中にもチラホラ。「やりたいことが見つければ、がんばれるんですが。」こんなセリフはおなじみだ。「やりたいことを探す日々」を否定するつもりはないが、現実的には、見つからない可能性のほうが高い。また、仮に見つかったとしても、それはいつになるかも分からない。そもそも全ての人間にやりたいことが見つかった時代などあったことはない。さらに、一番問題なのは、やりたいことへの思いの強さである。これで食っているのか？特定の職業に就くことで、経済的安定も

●結局、大半の人は、なんとか折り合いをつけて自分に向いているであろう職業を見つけ社会に入っていくのである。ただし、ここでいう折り合いとは悪い意味ではない。自分が大人社会の一員になれないときの恐さ、生活していけないときの恐さが無意識だがその人の心の中に存在していて、一方で早く親から独立したいとか、自分の力を試したいとかの思いもあり、そうしたもろもろを見つめて、選択をするのである。冒険といえば冒険である。初めてのことからその選択が正しいかはやってみなければ分からない。やってみても一年や二年で分からない。職に就くというのはそういうことなのである。きみは「イヤだ」とかいうかもしれない。しかし、生きるとはそういうことなのである。はっきりとした答えが見つからない中で、その手ばかりになりそうなものを求めて試行錯誤していくことなのである。

保障され、やりたいことができるのなら理想だが、そうでないとき万難を排して挑んでいくだけの覚悟があるのか？

▲▼▲継続希望の方へ▲▼▲

▶卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍していた教室までご連絡下さい。

新星堂他全国書店にて
好評発売中!!

■愛の壁■

—お父さんお母さん

あなたの愛は子供に届いていますか
著者：小林 憲右
2006年5月1日発行 (1,500円)

(小林(健))

(以下次号)